

アルバイトが進路志望に与える影響

——性別の違いに着目して——

宮本 幸子 (Benesse教育研究開発センター研究員)

■要約

- ◎性別にみると、女子のほうがアルバイトへの親和性が総じて高い。また、女子のなかでもより家庭の経済状況が厳しい生徒においてアルバイトに従事する確率が高い。
- ◎アルバイト経験と進路志望との関連をみると、女子はアルバイト経験によって四大・短大志向が抑制される。また、男子では実際のアルバイトの中身（時間、充実感が得られる活動をしているかどうか）が影響を与えているのに対して、女子ではそもそも「進路のため」という目的意識が高いかどうかの影響している。

1 問題関心

本稿では、アルバイト経験の有無やアルバイトに対するコミットメントの違いが都立高校生の進路志望におよぼす影響について、性別による差異に着目して分析・考察を行う。

中島史明(2000)によると、首都圏の進路多様校に在籍する生徒で、在学中のアルバイトを経験している者は8割にのぼり、さらにアルバイトをしている生徒の7割以上が学校で授業のある平日にも働いているという。今回の都立高校生を対象としたデータでも、アルバイトを「現在、定期的に行っている」生徒はAグループで8.4%、Bグループ47.4%、Cグループ44.3%となっている。特にB・Cグループでは、まったくアルバイトの経験がない生徒は2割強にとどまる。多くの生徒にとって、アルバイトが日常生活のなかで大きな位置を占めていることが推察される。そこで今回は都立高校生の進路志望に焦点をあてて、アルバイト経験は進路志望に独自に影響をおよぼすのか、その影響は性別によって異

なるのか、という点を検証したい。

2 先行研究の検討

2.1 高校生アルバイトに関する研究

先述したような高校生のアルバイト機会の多さに比すると、調査研究はそこまで体系的なものが行われているとはいえない。背景としては、おそらく大学進学率の高い学校を中心に規則上では禁止している高校も多く¹、アンケート調査を実施しても詳細な事柄までたずねにくいという調査実施上の制約もあるだろう。

しかし、1990年代以降は研究対象としても関心が集まっている(長尾 2002: 159)。高校

1 全国高等学校PTA連合会(1999)の調査によると、普通高校ではおよそ3割の生徒がアルバイトは校則で「禁止」されていると回答している。また、長尾由希子(2002)によると、高校生のアルバイトに関して、全国規模で公的な調査資料は皆無に等しく、統計がとられてこなかったこと自体がその位置づけの問題を示唆しているという。

生のアルバイトを対象にした調査としては、深谷昌志ほか（1992）、全国高等学校PTA連合会（1999）などがある。たとえば深谷ほか（1992）の調査では、アルバイト経験率が高いのは、就職希望者、各種・専修学校進学希望者、部活動に参加していない生徒、より下位ランクの高校の生徒、成績の低い生徒であることを明らかにしている。また、高校時代のアルバイト体験は、大学進学意欲を抑制する方向に働いていることを指摘している。

さらに2000年代に入り、高校生のアルバイト経験はフリーター・ニート問題との関連でも取り上げられるようになる。たとえば中島（2000）、耳塚寛明（2001）などでは、高校在学中のアルバイト経験と卒業後のフリーター志望に関連があることが指摘されている。

しかし、これらは単純集計の報告やクロス分析を中心にしたもので、アルバイト経験が独自に生徒の意識や行動に与える影響はあまり考慮されていない²。そうした分析を行っている先行研究としては、篠崎武久・高橋陽子（2005）があげられる。

2.2 性別で異なるアルバイト経験の影響

多くの先行研究においてクロス表による事実確認が中心であったのに対して、篠崎・高橋（2005）は計量的な手法を用いて複数の要因を制御したうえで、高校生の進路決定（正社員内定）とアルバイト経験の有無との関連を分析している。そこでは、アルバイト経験は正社員内定獲得に負の影響があること、しかしながら、性別にみると女子では有意な効果がみられるものの、男子ではその効果が有意でなくなることが指摘されている。

ただし、女子のみで有意な負の影響が生じてしまう要因や背景については、特に分析や考察がなされていない。それでは、なぜ性別によってアルバイト経験が進路決定に与える影響が異なるのだろうか。

3 分析視点

性別による差異を考えるとときに、いくつかの視点が浮かび上がる。1つは、アルバイト自体が「その者に関する何らかの負のシグナルを代理している可能性（篠崎・高橋 2005: 144）」である。たとえばアルバイト経験者の属性に偏りがあれば、アルバイト経験と進路との関係も擬似相関である可能性が考えられる。また、アルバイトの仕事内容によって、そこから受ける影響が異なることも推察される。すでに先行研究では、性別によってアルバイトで従事する職種や業務内容が異なることが指摘されている（中島 2000など）。さらには、同じ「アルバイト経験」と言っても、そのコミットメントで性別による違いがみられることも考えられる。仕事内容が異なれば、従事する期間や時間も異なるだろうし、深谷ほか（1992）の調査では、アルバイトによって得られると感じているものに性別による違いがみられることも報告されている³。コミットメントの度合いが異なれば、その「アルバイト経験」が生徒におよぼす影響も異なるのではないだろうか。

今回の調査では、アルバイトの職種、業務内容などはたずねていないので、「アルバイト自体が別のシグナルを代理している可能性」と「アルバイトに対するコミットメント」に着目したい。具体的には3つの分析を行う。

第一に、「誰がアルバイトをしているのか」という分析である。属性などを独立変数に、アルバイト経験を従属変数にしたクロス分析を行う。

第二に、「性別でアルバイトに対するコミットメントの違いはみられるのか」という分析である。本調査ではアルバイトへのコミットメントに関して、量的（アルバイトに従事する時間）・質的（友人数、充実感、目的意識など）両方の側面からたずねている。そうしたコミットメントは性別によって異なるのかという点を、クロス分析によって検証する。

第三に、「アルバイト経験の有無、あるいは

はアルバイトに対するコミットメントの違いは独自に進路意識に影響を与えているのか」という分析を行う。クロス表を提示したのちに、独自に影響を与えているかという検証のため、卒業後の進路志望（四大・短大志望ダミー）を従属変数にした二項ロジスティック回帰分析を行う⁴。

分析で使用する変数については、表3-1にまとめている。

- 2 そのほかにも進路多様校を中心に、進路志望・意識などを分析する際にアルバイト経験の有無が規定要因として取り上げられることはあるものの（荻谷ほか 2003など）、要因の1つとして言及されるにとどまり、アルバイト経験自体に焦点をあてたもの、アルバイト経験の内容に言及したものは多くみられない。
- 3 集計結果によると、女子は男子に比べて、アルバイトを通して忍耐力、礼儀、協調性、責任感などが身につくと感じている比率が高い。
- 4 四大・短大志望ダミーを従属変数として取り上げた理由は後述する（p.174）。

表3-1 分析で使用する変数

アルバイトに関する変数	
アルバイト経験	Q30 クロス表では「現在、定期的に行っている」以外の選択肢を「現在していない」とまとめている場合がある。ロジスティック分析で使用する際は「現在、定期的に行っている」を1、その他を0にしたダミー変数。
アルバイト時間 ※	Q30SQ1 ロジスティック分析で使用する際は「5時間未満」= 2.5、「5時間以上10時間未満」= 7.5……のように置き換えている。
アルバイト充実感 ※	Q36B クロス表では「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「あてはまる」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」としている。また、ロジスティック分析で使用する際は反転している。
アルバイト進路のため ※	Q40D クロス表では「とても積極的」「まあ積極的」を「積極的」、「あまり積極的でない」「まったく積極的でない」を「積極的でない」としている。また、ロジスティック分析で使用する際は反転している。
階層変数	
経済階層	「分析にあたって」（p.7）参照。
父大卒ダミー	Q51A 「四年制大学」「大学院」= 1、その他を0にしたダミー変数。
その他の変数	
授業熱心度	Q3 5教科について、「とても熱心」= 4点～「まったく熱心でない」= 1点として合算。Cronbachの α は0.754。
校内成績	Q10A クロス表では「1（下のほう）」「2」を「下・中の下」、「3（中くらい）」を「中」、「4」「5（上のほう）」を「中の上・上」としている。
平日学習	Q28A 「ほとんどしない」を0、その他を1にしたダミー変数。
通塾	Q29 「現在通っている」を1、その他を0にしたダミー変数。
進路志望	Q42 「四大・短大志望ダミー」は「四年制大学に進学する」および「短期大学（短大）に進学する」= 1、その他を0にしたダミー変数。

注）※は、本稿の分析ではアルバイトを「現在、定期的に行っている」ケースの回答のみ使用している。

4 分析の結果

4.1 誰がアルバイトをしているのか

～女子における経済階層の影響

それではまず、アルバイトをしているのは誰か、という点を検証したい。表3-2をみると、まず女子のほうが男子より10ポイント程度、「現在、定期的に行っている」比率が高い(p=0.000)。このアルバイト経験率の差は、本稿における基礎的な事実としておさえておきたい。またB・Cグループの生徒、校内成績の低い生徒、経済階層の低い生徒ほど、アルバイトを「現在、定期的に行っている」比率が高くなることがわかる。

さらに高校グループ・校内成績・経済階層

に関して性別でコントロールすると、興味深い結果がみとれる。表3-3をみると、高校グループおよび校内成績とアルバイト経験との関連は、性別にみた場合でもほぼ同様である。一方で、経済階層の影響は性別で異なっている。男子では統計的に有意な差はみられなかったものの、女子ではp=0.000で、「現在している」比率は経済階層「高い」42.7%に対して「中くらい」64.2%、「低い」68.1%と、大きく差が開いている⁵。このように、女子の場合は家庭の経済状況がアルバイト経験の有無に影響を与えており、男子の場合はそのような関連は認められない。

以上より、女子のほうがアルバイトへの親和性が総じて高いだけではなく、女子のなか

表3-2 アルバイト経験者の割合

		Q30 アルバイト経験				合計	N
		現在、定期的に行っている	現在はしていないが、以前定期的に行っていた	休み期間に集中的に行っている	したことがない		
性別 ***	男子 (%)	28.3	11.8	8.4	51.6	100.0	729
	女子 (%)	39.4	12.2	5.4	43.0	100.0	686
	合計 (%)	33.6	12.0	6.9	47.4	100.0	1,415
高校グループ ***	Aグループ (%)	8.8	6.9	5.2	79.1	100.0	580
	Bグループ (%)	51.6	9.9	11.3	27.2	100.0	283
	Cグループ (%)	50.4	18.5	6.6	24.6	100.0	558
	合計 (%)	33.6	12.0	7.0	47.4	100.0	1,421
校内成績 ***	下・中の下 (%)	41.2	14.3	5.4	39.1	100.0	575
	中 (%)	31.0	11.1	8.3	49.6	100.0	506
	中の上・上 (%)	25.2	9.9	7.5	57.4	100.0	333
	合計 (%)	33.8	12.1	6.9	47.2	100.0	1,414
経済階層 **	高い (%)	39.3	14.6	8.9	37.2	100.0	247
	中くらい (%)	47.8	10.8	10.4	31.1	100.0	251
	低い (%)	56.9	15.1	5.0	23.0	100.0	239
	合計 (%)	47.9	13.4	8.1	30.5	100.0	737

注) +: p < 0.10, *: p < 0.05, **: p < 0.01, ***: p < 0.001 (以下も同様)。

でもより家庭の経済状況が厳しい生徒においてアルバイトに従事する確率が高いといえる。

4.2 アルバイトに対するコミットメントの違い～女子のコミットメントの強さ

つづいて、アルバイト経験者（「現在、定期的に行っている」）に限定して、性別によるアルバイトに対するコミットメントの違いを検証したい。結果は表3-4である。

性別のクロス分析をみると、「アルバイト充実感」「アルバイト進路のため」「アルバイト時間」では、すべて有意な差がみられる。女子のほうが「アルバイトが充実している」とする者（5%水準で有意）、「進路に役立てるためにアルバイトをする」者が多い（1%

水準で有意）。また、週あたり15時間以上している層が多く、15時間未満の層が少ない（5%水準で有意）。このように、全体的に女子のほうがよりアルバイトへのコミットメントが強い様子がうかがえる。

-
- 5 高校グループの影響を除くため、B・Cグループに限定したデータを使用した場合でも同様の傾向がみられた。男子では経済階層とアルバイト経験率との間に有意な差は認められず（現在している：高い44.8%・中くらい43.0%・低い47.0%、 $p=0.833$ ）、女子では5%水準で有意となっている（高い52.1%・中くらい68.0%・低い69.0%、 $p=0.022$ ）。

表3-3 アルバイト経験者の割合（性別で統制した場合）

			Q30 アルバイト経験		合計	N
			現在している	現在していない		
男子	高校グループ ***	Aグループ (%)	8.3	91.7	100.0	301
		Bグループ (%)	41.3	58.7	100.0	143
		Cグループ (%)	42.8	57.2	100.0	285
		合計 (%)	28.3	71.7	100.0	729
女子	高校グループ ***	Aグループ (%)	9.4	90.6	100.0	278
		Bグループ (%)	62.1	37.9	100.0	140
		Cグループ (%)	58.6	41.4	100.0	268
		合計 (%)	39.4	60.6	100.0	686
男子	校内成績 **	下・中の下 (%)	35.9	64.1	100.0	281
		中 (%)	23.7	76.3	100.0	262
		中の上・上 (%)	23.8	76.2	100.0	181
		合計 (%)	28.5	71.5	100.0	724
女子	校内成績 ***	下・中の下 (%)	46.4	53.6	100.0	291
		中 (%)	39.1	60.9	100.0	243
		中の上・上 (%)	26.7	73.3	100.0	150
		合計 (%)	39.5	60.5	100.0	684
男子	経済階層	高い (%)	34.8	65.2	100.0	115
		中くらい (%)	35.5	64.5	100.0	141
		低い (%)	45.4	54.6	100.0	119
		合計 (%)	38.4	61.6	100.0	375
女子	経済階層 ***	高い (%)	42.7	57.3	100.0	131
		中くらい (%)	64.2	35.8	100.0	109
		低い (%)	68.1	31.9	100.0	119
		合計 (%)	57.7	42.3	100.0	359

表3-4 アルバイトに対するコミットメント（性別、アルバイト経験者のみ）

		Q36B アルバイト充実感		合計	N				
		あてはまる	あてはまらない						
性別*	男子 (%)	68.4	31.6	100.0	196				
	女子 (%)	80.3	19.7	100.0	269				
	合計 (%)	75.3	24.7	100.0	465				
		Q40D アルバイト進路のため		合計	N				
		積極的	積極的でない						
性別**	男子 (%)	44.9	55.1	100.0	198				
	女子 (%)	55.3	44.7	100.0	266				
	合計 (%)	50.9	49.1	100.0	464				
		Q30SQ1 アルバイト時間					合計	N	
		5時間未満	5時間以上 10時間未満	10時間以上 15時間未満	15時間以上 20時間未満	20時間以上 25時間未満			25時間以上
性別*	男子 (%)	6.3	22.0	26.3	27.3	10.7	7.3	100.0	205
	女子 (%)	7.8	14.1	20.4	30.1	20.1	7.4	100.0	269
	合計 (%)	7.2	17.5	23.0	28.9	16.0	7.4	100.0	474

4.3 アルバイト経験と進路志望の関係

以上を小括すると、女子のほうが家庭の経済状況の影響を受けてアルバイトをしている生徒が多く、さらにアルバイトをする場合のコミットメントも強い可能性が示唆された。それでは、性別でアルバイト経験が進路志望に与える影響は違うのだろうか。

4.3.1 クロス分析～「進路に役立てるためのアルバイト」がプラスに作用する女子

それではまず、アルバイト経験の有無と進路志望の関係をクロス表でみていきたい。ここでのクロス表は進路志望に対する高校グループの影響を考慮して、B・Cグループに限定したデータを用いている。表3-5をみると、全体ではアルバイトをしている生徒で卒業後の進路志望「四大・短大まで」が少なく、「専門学校まで」が多くなる。さらに性別を加えた三重クロスでみると、男女ともに有意な差はみられるものの、女子のほうがアルバイト経験によって四大・短大志望率により大きな差が生じている。

さらにアルバイトに関する変数のなかで、Q40D「進路に役立てるためにアルバイトをする」に着目したい。「進路に役立てる」と

いったときには、様々なことが考えられる。自分の目指す職業に近い仕事を体験する、周囲の人から進路についてのアドバイスを受ける、といったことも考えられるし、進学を希望して学費のためにアルバイトをすることも考えられる。そこで、性別と「アルバイト進路のため」、さらに進路志望による三重クロスを作成した(表3-6)⁶。ここでも高校グループの影響を考慮して、B・Cグループに限定したデータを使用している。これをみると、男子は有意差がないのに対して、女子は10%水準ではあるが有意差がみられる。女子では「進路のため」にしている生徒ほど「四大・短大まで」が多く、「就職」「その他」が少ない。これをどのように解釈したらよいだろうか。推測にとどまるが、4.1で女子のアルバイト経験率に経済階層の影響があったことをあわせて鑑みると、女子のほうが「進路に役立てるため」といった際に、進学を志向して家計や学費を補うためにアルバイトに従事する生徒が多く、男子のほうがそうした傾向は小さいのではないだろうか⁷。

以上より、女子にとってアルバイトをすること自体は、進路志望にも負の影響をおよぼしやすいが、「進路のため」と意識している

表3-5 「進路志望」×「アルバイト経験」(B・Cグループのみ)

			Q42 進路志望				合計	N
			四大・短大まで	専門学校まで	就職	その他		
全体	アルバイト 経験 ***	現在している (%)	34.1	30.3	15.9	19.7	100.0	402
		現在していない (%)	49.5	17.9	13.1	19.5	100.0	390
		合計 (%)	41.7	24.2	14.5	19.6	100.0	792
男子	アルバイト 経験 *	現在している (%)	43.3	21.6	18.1	17.0	100.0	171
		現在していない (%)	53.2	14.2	12.4	20.2	100.0	233
		合計 (%)	49.0	17.3	14.9	18.8	100.0	404
女子	アルバイト 経験 **	現在している (%)	27.5	37.1	14.0	21.4	100.0	229
		現在していない (%)	44.5	23.9	13.5	18.1	100.0	155
		合計 (%)	34.4	31.8	13.8	20.1	100.0	384

表3-6 「進路志望」×「アルバイト進路のため」(B・Cグループ、アルバイト経験者のみ)

			Q42 進路志望				合計	N
			四大・短大まで	専門学校まで	就職	その他		
全体	アルバイト 進路のため	積極的 (%)	36.3	31.4	15.7	16.7	100.0	204
		積極的でない (%)	32.0	29.4	16.2	22.3	100.0	197
		合計 (%)	34.2	30.4	16.0	19.5	100.0	401
男子	アルバイト 進路のため	積極的 (%)	40.8	23.7	22.4	13.2	100.0	76
		積極的でない (%)	45.7	20.2	14.9	19.1	100.0	94
		合計 (%)	43.5	21.8	18.2	16.5	100.0	170
女子	アルバイト 進路のため +	積極的 (%)	33.9	36.2	11.8	18.1	100.0	127
		積極的でない (%)	19.6	38.2	16.7	25.5	100.0	102
		合計 (%)	27.5	37.1	14.0	21.4	100.0	229

場合には、その影響の度合いが小さくなっている⁸ことが考えられる。性別によって、アルバイトへのコミットメントが進路志望におよぼす影響が異なっている。

6 「アルバイト進路のため」にあてはまる生徒は、「アルバイト充実感」が高い(「進路のために積極的」な生徒で「アルバイト充実」は80.1%、「積極的でない」生徒では69.9%、 $p=0.008$)という特徴がある。しかし、「アルバイト進路のため」と「アルバイト時間」とのクロス分析では有意な差がみられなかった。

7 表3-6において、男子では有意差はみられなかったものの、「進路のため」に積極的な生徒ほど「四大・短大まで」が少なく、「就職」が多い点には注意しておきたい。これは女子の数値とは逆の傾向を示している。女子にとっては「進路のため」のアルバイトが学費を稼ぐという性格が強いものに対して、男子にとっての「進路のため」とは、その延長上で就職することを意味しているのかもしれない。

8 表3-5、6で女子の結果を比較すると、「四大・短大まで」の比率は、アルバイトをしていない>アルバイトを進路のために積極的にしている>進路のために積極的ではない、の順になっている。

4.3.2 二項ロジスティック回帰分析～アルバイト経験は進路志望に独自の影響を与えているのか

それでは最後に、アルバイト経験、アルバイトに対するコミットメントが独自に進路志望に影響を与えているかどうかという点を検証したい。表3-7、8は、四大・短大志望ダミーを従属変数にした二項ロジスティック回帰分析である⁹。ここでもB・Cグループに限定して分析を行っている¹⁰。四大・短大志望ダミーを従属変数にしたのは、先ほどのクロス分析でみたように、女子において「進路のため」という意識と進学志向の相関が高いためである。

まず、アルバイト経験がもたらす影響につ

いて、表3-7をみていく。これをみると、女子ではアルバイト経験が負の影響をおよぼすのに対して、男子ではそうした傾向がみられない。女子に関して言えば、アルバイト経験が独自に四大・短大志望に影響を与えていることがわかる。

さらに、サンプルをアルバイト経験者（「現在している」）に限定し、アルバイトに対するコミットメントを示す変数を用いて分析したのが、表3-8である。女子は「アルバイト進路のため」が正に有意である。「アルバイト時間」は負に有意であるが、男子のほうはその傾向は強く、さらに「アルバイト充実感」が正の効果をもたらしている。つまり、男子では実際のアルバイトの中身（時間、充

表3-7 アルバイト経験と四大・短大志望との関係（B・Cグループのみ）

	男子		女子	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
授業熱心度	0.002	1.002	0.040	1.041
平日学習	0.918	2.505 *	0.423	1.527
通塾	0.598	1.818	0.922	2.515 +
経済階層（高ダミー）	-0.605	0.546	0.028	1.029
経済階層（低ダミー）	-1.012	0.363 **	-0.288	0.750
父大卒ダミー	0.316	1.371	0.092	1.097
高校グループ（Cグループダミー）	-0.555	0.574 +	-1.508	0.221 ***
校内成績	0.615	1.850 ***	0.394	1.483 *
アルバイト経験	0.144	1.154	-0.935	0.393 **
定数	-1.398	0.247 +	-0.869	0.419
-2対数尤度	264.810		233.135	
Cox&Snell R2乗	0.181		0.242	
Nagelkerke R2乗	0.242		0.331	
モデルの有意確率	0.000		0.000	
N	224		224	

実感が得られる活動をしているかどうか)が進路志望に影響を与えているのに対して、女子ではそもそも「進路のため」という目的意識が高いかどうかの影響を与えている。

4.3.1における考察を振り返ると、女子では「進路のため」といったときに、経済階層の影響を受けた(=学費等を必要とする)大学志望のためという可能性が高かった。また表3-7より、アルバイト経験自体は四大・短大志望に有意に負の影響を与えていることを考えると、女子では最初から目的意識を持ってアルバイトに取り組む場合は、アルバイト経験を通して大学志望が引き下げられる可能性は低く、逆にそのような意識を持たずにアルバイトに従事する場合は、アルバ

イト経験によって進路志望を引き下げてしまう生徒がいるという可能性が考えられる。

- 9 特に女子では、アルバイト経験と経済階層との相関が高かったため、経済階層の影響をコントロールする必要があると考え、分析には階層変数を入れている。そのため、サンプル数が若干少なくなっているが、階層変数を入れずにサンプル数を確保して同様の分析を行っても、アルバイト経験のおよぼす影響については同じ傾向がみられた。
- 10 Aグループは四大・短大志望が多く、かつアルバイト経験者が少ないため、その偏りを考慮して分析から除外した。

表3-8 アルバイトに対するコミットメントと四大・短大志望との関係
(B・Cグループ、アルバイト経験者のみ)

	男子		女子	
	B	Exp (B)	B	Exp (B)
授業熱心度	-0.132	0.876	-0.032	0.969
平日学習	2.917	18.480 **	0.834	2.303
通塾	1.138	3.121	1.367	3.924 +
経済階層 (高ダミー)	-1.922	0.146 *	0.033	1.033
経済階層 (低ダミー)	-1.840	0.159 **	-0.650	0.522
父大卒ダミー	0.485	1.624	-0.263	0.769
高校グループ (Cグループダミー)	-0.474	0.622	-1.308	0.270 **
校内成績	0.877	2.403 **	0.763	2.145 **
アルバイト時間	-0.129	0.879 **	-0.064	0.938 +
アルバイト充実感	0.564	1.758 +	0.520	1.682
アルバイト進路のため	0.252	1.287	0.783	2.187 **
定数	-0.304	0.738	-4.768	0.008 **
-2対数尤度	93.949		122.085	
Cox&Snell R2乗	0.364		0.269	
Nagelkerke R2乗	0.489		0.389	
モデルの有意確率	0.000		0.000	
N	103		141	

5 まとめと課題

本稿では性別によるアルバイトの影響の違いに着目し、「誰がアルバイトをしているのか」「アルバイトに対するコミットメントの違い」「アルバイト経験が進路志望に与える影響」の3点を検証した。女子はより経済階層の影響を受けてアルバイトに従事しており、アルバイト経験の有無によって四大・短大志望に負の影響を受けやすい。ただし、「進路のため」という意識が強ければ、その影響の程度は弱くなることがわかった。一方男子は、アルバイト時間やアルバイトの充実感によって、進路志望が左右されやすいということがわかった。

このように、高校生のアルバイトがすべての生徒にとってプラス/マイナスになるとひとくくりにして語ることは難しい。しかしながら、アルバイト経験が女子にとって有意に負の影響をおよぼしていたこと、男子においてもアルバイト時間が有意に負の影響をおよぼしていたことなどを考えると、高校生の進路展望にとってその影響は看過できるもので

はないだろう。本稿の分析からは、どのようにアルバイトに従事しているかという現状の違いから、対応を考え直すことが示唆される。1つの対応としては、中島（2000）が論じているように、高校生のアルバイトを教育・訓練の機会としてとらえ直すということが考えられるだろう。長時間の労働が負の影響をもたらすタイプの生徒にはこのような指摘が有効であろう。また、女子のアルバイト経験の有無が経済階層の影響を受けているのは、おそらく背景に子どもへの家庭の教育支出にジェンダー格差があるためであり、そうした視点も忘れてはならない。家庭環境の影響を受けている生徒には、奨学金をはじめとした経済的な援助など、アルバイト自体には直接関係のない支援が有効であることも考えられる。

本稿も多くの課題を残しているが、高校生のアルバイトに関しては検証されていないこと、判明していないことがまだ多い。今後さらに幅広い調査対象、研究視点から検討し、多くの生徒にとって時間や労力を費やす場になっている現状に対応していく必要があるだろう。

<引用文献>

- 深谷昌志・武内清・明石要一・木下勉・畠山滋、1992、『モノグラフ・高校生 vol.34 高校生たちのアルバイト体験』福武書店教育研究所。
- 菊谷剛彦・濱中義隆・大島真夫・林未央・千葉勝吾、2003、「大都市圏高校生の進路意識と行動——普通科・進路多様校での生徒調査をもとに」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42: 33-63。
- 耳塚寛明、2001、「高卒無業者層の漸増」矢島正見・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界——トランジションの社会学』学友社、93-108。
- 長尾由希子、2002、「高校生アルバイトの量的推移に関する一試論」『東京大学大学院教育学研究科紀要』42: 159-68。
- 中島史明、2000、「アルバイトの実態とその規定因」『調査研究報告書No.138 進路決定をめぐる高校生の意識と行動——高卒フリーター増加の実態と背景』日本労働研究機構、175-91。
- 社団法人全国高等学校PTA連合会、1999、『高校生のアルバイト等に関する調査研究』（<http://www.zenkouparen.org/active/report01.pdf>, 2008.8.20）。
- 篠崎武久・高橋陽子、2005、「高校生のアルバイト経験と進路の関係」『若年者の就業行動・意識と少子高齢社会の関連に関する実証研究 平成16年度総括研究報告書』厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業、133-44。